

## 第4章 地方都市金沢と伝統工芸

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/10827">http://hdl.handle.net/2297/10827</a>

## 第4章 地方都市金沢と伝統工業

### 第1節 金沢の都市としての性格

「北国新聞」は1979(昭和54)年、金沢市制90周年に際して連続100回(1979年1月5日～5月11日)にのぼる「新金沢考」という特集を掲載している。この特集は「都市の新しいあり方」(「北国新聞」,「新金沢考」(1), 1979年1月5日, 以下本節に限り引用に際しては回数, 掲載日付のみを付記する)を見直すために, 都市金沢を様々な角度からレポートするという企画のようである。それぞれは金沢の諸側面を個別に取り出したものではあるが, 都市としての金沢の性格については, その大半が提出されていると考えられる。戦前の金沢を分析する際に参考とすることができるので, それをもとに金沢がどのような都市として受けとめられているか, その洗い出しの作業を試みることにしよう。

まず第1は「消費都市」((1)・(2), 1月5・6日)として中心商店街の景況が取りあげられる。これは金沢の性格を規定するような主要産業・工業がないことの表現でもあり, 同時にかけて城下町として武士の消費に依存していた性格の継続ともみることができる。この消費都市に「観光都市」(14, 1月20日), 「人気都市」(13, 1月19日)という性格が結合しているのも現状の特徴である。ただし観光が「画一化」し, 「金かけない景観保存」, 「住民犠牲」, 「少ない名所がっかり」(10, 1月16日)という批判はよく指摘されるところでもある。その意味では上手に宣伝された都市ということもできる。

第2は百万石の「城下町金沢」((8)・(11), 1月13・17日)という表現で, これはもっとも一般的な評価の部類であろう。この中には「伝統的都市」, 「古都」というその歴史を強調するものと, 「百万石」, 「なお根強い殿様人気」(12, 1月18日)といった加賀藩・前田家との関係を重視するもの, 「伝統工芸の町」(16, 1月23日), 「職人のまち」といった友禅, 象眼, 蒔絵な

どの金沢工芸に主眼をおくものなどが含まれている。伝統ということの内容に関しては後にあらためて検討するが、いずれにせよ城下町の特徴を様々な形で見る都市論のグループである。

第3は第2と関係するが「学都」(5), 1月10日), 「文教都市」(91)~(93), 4月30日, 5月1・2日), 「文化都市」といった評価である。これはかつて金沢を新井白石が「天下の書府」と形容したが、そうした過去と現状とを比較する際によく見かける形容である。しかし金沢独自の文化性の内容、有無といった点については、どういうわけかあまり積極的には論じられていない。また金沢の都市としての地位(例えば人口数など)が低下するのと歩調をあわせるようにして、文化面での評価も低下してきたように思われる。しかし、そうした中で最近ではその文化性を利用せんとして「集会都市」といった新しいキャッチフレーズも登場している。

第4は「地方中核都市」, 「中枢管理都市」(24), 2月1日)である。金沢には国や民間企業の出先機関が多く、北陸3県の中核、中枢都市としての機能が求められていることは事実である。このことは戦前において師団・高等学校等が設置されていたことと関連性があるのは言うまでもない。しかし金沢の現状は「ヒンターランドの規模の貧弱さ」(同前)から広域中核都市ではなく、より狭い地方の中心都市といった方が適切であろう。

第5は地方都市の典型として、大都市の比較対象とされる場合である。ポジティブな面ではひとつは「ほどほどに住みよい町」(59), 3月14日), 「歩行都市」(96), 5月5日)といったコンパクトな都市構造に着目する考えである。もうひとつは現実にそうであるかどうかは別にして「緑の都市」, 「森の都」(41), 2月21日)という風にその自然環境を評価したり, 「医療体制の先進都市」(46), 2月27日)といった生活環境の良さを指摘する。しかし一方では「北国」とは名ばかりの夏の暑さや冬の重い雪は決して快適な住み心持ちを保証してはいない。ネガティブな面では都市計画・政策の後進都市でもある。狭い道路に多い車(27)~(29), 2月5~7日), 「歩行者軽視」(40), 2月20日), 「危険な宅造」(30), 2月8日), 上・下水道, 地下水問題(31)~(34), 2月9~13日), 「ゴミ戦争」(35)~(36), 2月14・15日)などと都市問題は山積している。これらをまとめて「過密都市」という表現さえ

ある。

以上金沢に関して、おそらく都市に付く形容詞の大部分は出つくしているといっても過言ではなかろう。これらの中で第4・5のテーマは現在の金沢の都市問題を論ずる場合には不可欠の問題であるが、経済史的な観点から金沢を考えようとするのであるからここでは第1～3のテーマの中から次の2点について検討してみたい。

まず消費都市という表現に示されたところの人口構成・産業構造上の問題である。まず表4・1は戦前における都市の中での金沢の位置をあらわしている。

表4・1 人口5万人以上の都市と人口数(1918年)

6 大都市		5-10万都市(31市)		旭川	69,421
東京	2,347,442	福岡	98,583	下関	67,866
大阪	1,641,580	新潟	97,274	豊橋	66,839
京都	670,357	岡山	96,446	浜松	61,029
神戸	592,726	札幌	94,647	福井	59,932
横浜	447,423	鹿児島	92,306	那覇	59,362
名古屋	436,609	八幡	89,472	甲府	58,453
10-20万都市(8市)		横須賀	88,742	室蘭	58,349
長崎	198,147	和歌山	84,603	松山	58,346
広島	162,391	堺	75,346	前橋	58,320
金沢	158,637	静岡	73,972	岐阜	57,909
呉	154,687	熊本	73,613	宇都宮	57,377
函館	133,698	門司	73,377	津	54,522
佐世保	123,555	徳島	73,096	水戸	53,030
仙台	122,720	富山	73,032	高知	50,955
小樽	102,467	大牟田	72,482	松本	50,356

『日本帝国統計年鑑』(1918年)より作成。

金沢は6大都市に次ぐランクの都市である。人口10万以上の都市は8市あるが、その中では広島・仙台と類似する性格の都市であると思われる。この時点は都市化の進展は全国的にみるとそれほどではなく、10万以下の人口の

都市数が多い。しかし次の表4・2は金沢の明治維新以降の人口の伸びがはかばかしくない状況を明瞭にしている。

表4・2 金沢市の人口・面積

	人口	面積	対人口比
1890年	93,517	9.89	1.06
95	87,746	〃	1.13
1900	95,190	〃	1.04
05	102,683	〃	0.96
10	113,819	〃	0.87
15	137,047	〃	0.72
20	130,027	〃	0.76
25	147,951	20.66	1.40
30	157,639	〃	1.31
35	175,049	52.07	2.79
40	186,265	89.72	4.82

『金沢市統計書』より作成。面積の単位はkm<sup>2</sup>。  
対人口比は人口1万人当りの面積(km<sup>2</sup>)。

とくに1920年代迄はにぶい伸びで、その後大巾な市域の拡大が人口の増加をもたらしている。旧藩以来の市域のもとでは第1次大戦期によりやく藩政期と同程度の人口に回復しているといった状況である。1925年以後も増加はしているものの、同時期は全国的に見て人口10~20万規模の都市の人口増がもっとも著しい時期であった。したがって金沢は人口の面で見れば戦前は一貫して地位の低下

傾向のなかにあったといえる。このことは工業に依存しない都市の特徴のひとつのあらわれとも見ることができる。

次に職業別の人口構成を次の表4・3より判断する。

表4・3 関連都市の人口構成(1930年)

	農業	工業	商業	交通業	公務自由業	内官吏軍人
金 沢	3.6	35.8	28.5	5.1	19.1	9.5
仙 台	6.9	26.2	27.8	5.6	23.8	13.5
静 岡	11.0	37.1	26.7	4.9	12.7	5.4
和歌山	3.7	38.6	31.7	5.5	13.1	4.7
岡 山	4.6	33.4	32.3	6.4	16.8	6.2
広 島	6.9	31.2	29.5	6.9	17.4	8.1
熊 本	5.7	26.8	31.9	5.4	20.3	11.1

同年『国勢調査結果』より作成。

これは1930（昭和5）年の『国勢調査結果』をもとに、金沢と人口数が近い都市、都市機能が類似していると思われる都市をピックアップして作表したものである。主に職業別の大分類の整理をしてみたが、公務自由業のみ中分類の「官吏官吏雇傭者」と「陸海軍現役軍人」を内訳として加えた。この中で仙台は商工業人口の比重が相対的に低く、一方では公務自由業者が多い。その対極は静岡で商工業者が3分の2を超え、都市でありながら農業人口も10%を占めている。公務自由業の比重も相対的に低い。このような特徴から見て金沢は熊本・広島とともに仙台型に属する。4市は公務自由業の中で軍人・官吏が過半数にも及んでいることから、地方中核・管理都市とみてさしつかえない。この点は3市とも戦後も継続した傾向となっているが、抱えるヒンターランドの大きさの違いもあって、広島・仙台の都市規模のその後の拡張が目立っている。

商工業の人口構成だけに限定するならば金沢は静岡・和歌山と類似している。しかし都市の性格は前述のように公務自由業の比重の差に注目する方が適当だと考えられる。なかでも官吏・軍人の比重の大きいことはその都市の政治・軍事機能が高いことを示し、消費都市のひとつの要件を構成している。さらに金沢の場合商業人口は比較的少ないが、その中における接客業人口27.5%で、仙台・広島とならんで高率である。この点も消費都市の性格を人口構成上で表現していると判断される。

もうひとつは城下町金沢という歴史性とか伝統の問題である。伝統の意味については金沢を具体的に検討したうえで、第4節で若干の論及を試みる。城下町の観点での金沢論はもっとも分量の多いところでもあるが、その個別業績の批判をここでおこなう余裕はない。しかし最近全国的な城下町の近世研究がかなり進展しており、そうした中で金沢の位置を少し論じておきたい<sup>(1)</sup>。

全国的研究といった場合個別城下町事例の比較研究がその大半を占めているようである。代表的なタイプのひとつとして城下町の立地条件、形状などから比較論を述べるものがある。豊田武とともに封建都市研究の水準をになってきた原田伴彦は最近の論文でも「山の城下町」、「川の城下町」、「海の城下町」、「湖の城下町」<sup>(2)</sup>といった魅力的な形容で独特の城下町論を展

開している。もうひとつは近世都市研究の中から進んだもので、都市の自治・行政機能といった都市機能の側面からの研究である。最近では深化した幕藩制国家論研究の1分野として都市、なかでも城下町の生活史まで含んだ多角的な研究が続出している。最新の研究の中では松本四郎『日本近世都市論』に注目しておきたい。松本は幕藩制支配のもとでの都市と農村との具体的なかわり方に関心を持ち、「農村で土地を失った農民はどこへ行くのか」、「どのような都市住民に転化させていったのか」、「農民を受入れずにふたたび農村に戻させたのか」<sup>(3)</sup>といった興味深い設問を自らに発している。その解答の1例として農村—在町—城下町という人的な流れを提出し、事例としては砺波平野農村と金沢の関係を分析している。城下町金沢から見ると次節で考察する相対請地とその城下町における位置づけにかかわる問題として受けとめることができる。

この都市の研究関心は近代経済史の範囲に引き入れてみるならば農村人口の地方都市、さらには大都市への移動形態、より端的に言えば労働力移動の具体的な事例研究と接続されるべき重要な視角である。この課題は一般化すれば都市が現住する住民に対してどのような役割を果たし、意味をもっているかという問題だけにとどまらず、その都市が全国的な支配関係、生産関係の中でどのような位置にあるのかという問題へのアプローチを期待しているといえよう。城下町に即しているならば、それが幕藩制国家支配の中で有していた歴史的意義を、近代資本制の下でどのように再編され、変貌し、受け継がれたのかという点を検討する必要がある。そのことの若干の試みを次節以下でおこなう。

さて現状の金沢論の点検を冒頭でおこなったが、そこで欠けていた次の2点について述べて諸金沢論のまとめにかえたい。

北陸は「真宗王国」とよくいわれる。とくに「越前・加賀・能登・越中の西部四ヶ国」では、真宗門徒の比率は圧倒的であり、日本で最大の既成仏教教団である両本願寺派（いまの本願寺派・大谷派）の最も主要な地盤<sup>(4)</sup>となっている。浅香年木は真宗の信仰が北陸ほど生活に根をおろしきっている地域は少ないとし、その理由は雪国で冬が長いことにあると指摘している。そのなかで金沢は金沢御坊を建設して加賀本願寺王国の中樞をなしたという歴

史を持っている。「真宗優勢都市」というような肩書きを付け加えてもさしつかえなかろう。中世末の真宗寺内町（若松御坊、金沢御坊もこれに該当する）研究も伸展しており、これらを視野において考えるべき点も少くない。

もう1点は石川・加賀の県民性、金沢でいえば市民性となるが、そのような住民のある程度共通した性格・意識の問題を追加しておこう。ただし県民性・市民性といったものをあまりこまかいレベルで論じることはできない。

まず県民性を取り扱った3著を紹介する。宮城音弥は畿内躁うつ質地帯の北限を石川県とし、それは「海上の道によって拡散したかのごとく、能登のほうにいちじるしく、加賀に分裂質的要素が強い」<sup>6)</sup>と指摘している。その県民性は性格は強気で、特性としては「陰気、保守的、規則正しい、悪がしこい、しつこい、独創的、情熱的、とっつきにくい、消極的、繊細な、むこうみず」<sup>6)</sup>といった諸点を列挙している。保守的と独創的、消極的とむこうみずなどやや対立した点もあるが、一応傾聴に価する。祖父江孝男は文化人類学的考察という前者とは異ったアプローチを県民性に対してしている。これも内容を簡単に列挙すると石川県は「県人全体の結合がもっとも強い」ところとし、「越中強盗、加賀こじき、越前の詐欺」という文句を引用しつつ「加賀（石川）はオットリして消極的。いざとなったらどうしてよいかわからず、ただできるのは乞食をするぐらいが関の山」<sup>7)</sup>と低い評価を下している。朝日新聞社の『新人国記』（第1巻、1963年）では辛棒強い、コツコツ仕事に精を出す、おっとりして小成に安んじる、尊大で御殿女中のな気質、加賀人は賢いが積極性に欠けるといった諸点を指摘する。3著の共通するところはおっとりとしている、消極的で小成に安んじる、尊大で保守的で結束力が強いといった県民性ということになろうか。もちろん金沢の住民は加賀、能登出身者以外の外部流入人口も含まれているが、金沢は上記のような性格を有する住民の都市という面もあると理解しておくことにしよう。

## 第2節 城下町の都市化

近世の金沢は周知のように加賀前田藩の城下町として、三都につぐ規模を誇りその最盛期には10万を超える人口を有していたと言われている。「越登

加州の武士大中小身皆一府に集って広大をなすこと江戸の風」<sup>(8)</sup> という形容がなされるほどであった。まずその近世金沢の都市としての状況・性格を、その研究の第1人者である田中喜男の分析を参考として考えてみる<sup>(9)</sup>。

金沢は慶長ごろから大量の武士団の帰住により近世的な城下町の形成がはじまり、おおよそ17世紀の後半の寛文期にいちおう完成した。金沢城を中心に家臣団が集住し、一向宗門徒の真中に位置したことから3つの寺院群（寺町・小立野・卯辰山麓）を外部に集中配置し、軍事的な防禦線を作った。これに犀川・浅野川、背に山地、前に海をもった自然の要地でもあった。武士団の領有地・寺院とともに町人居住地も加わって、人口10万をこえる城下町がここに構築されたのである。

城下町ということばを厳密に用いる場合、町人居住地を指すことが多いが、これは本町、地子町、寺社門前町、相對請地の4つから構成された。武家の生活必需品や軍需品を供給する町人たちは本町、地子町に集中した。本町町人は格式が一段上とみなされ、拝領地と同じように夫役と役銀を負担した。本町40町は現在の香林坊から武蔵が辻を経て尾張町、橋場町、浅野川大橋にいたる北国街道の西側に集中し、城の東半分をぐるりと囲む地域であった。地子町とは当初七カ所と呼ばれたように7町であったが、のち13町、幕末には18町とひろがっているが、いずれも本町につづいた地域である。そこでは年貢にかわって地子銀の徴収をうけた。寺社門前町は町人が寺社と契約してその門前内に居住し、商売している地域で、寺社に地子を納めた。幕末には町家約900軒を数えたといわれている。

相對請地とは、農地をもっている農民と居住などのために土地を必要とする町人とが、相互に貸借契約を結んだ土地である。藩政時代は土地の売買が禁止されていたので、町人の農地取得はみとめられなかった。したがってこのような方法が生まれたわけで、金沢の市域が拡大していった部分でもあった。やがて町奉行支配下に入った相對請地の町はそれまで農民に支払っていた地子米代銀（地代）を町民がそれぞれ町会所に納入することとなり、町会所はこれをまとめて村方に渡し、貸地分に応じて分配された。ここには主として武家及町方の奉公人といった下級労働力が留め置かれ、また周辺農村の困窮化にともなってなんとか城下町にもぐり込もうとする没落農民のふきだ

まりともなった。

この相對請地の存在は地方大都市金沢のひとつの特徴といってもさしつかえない。それは金沢城を中心に半径800メートルか1キロの円内に城下町があるとすると、その外周部で、浅野川・犀川周辺の北部と南部に厚い型で形成されていった。その拡大の仕方はひとりで状に、一見無秩序であったかのように見えるが、4つの町の構成とその地域性には一定の区分が明確にあった。全国の城下町研究の中で金沢がもつ相對請地の機能、とくに農村と都市との関係の中で果す役割の側面でそれが重視されてきている。「都市域の拡大が農民の流入によってというより、武家地を浸食するような形でみられるようになったこと、またその住民も下級家臣や武家奉公人などが都市下層民と混住するという状況がみられるようになったこと、ということはもともと強固な身分制原理が貫徹し、しかも農村との結びつきの弱い城下町での変質の一つの現われ方もいえよう」<sup>(10)</sup>。

この点を金沢の相對請地の住民の職業構成の面でみると、北部の7町の例(19世紀初頭)によると、740戸のうち半数は日稼人、4割は下級武士(おもに足軽)や武家奉公人、その他は大工・鍛冶・笠縫などの職人層であった。これが本町になると半数は商人がしめ、はっきりとした対照をなしている。日稼人は“かせにん”と通称され、定職を持たず、侍や町人の必要に応じて屋根ふきの手伝いや土方・人足など日雇いとして生活していた。この地は新開地的なものであり、下町風態であって、わりあい下層の人々が多く、おのずから賤民的職人や使役人階層の住宅町に成長したといわれている(その代表的な地域に大衆免諸町がある)<sup>(11)</sup>。金沢の都市としての形成期は相對請地がひとつの城下の膨張の証となったが、享保期には「三都の外に並なき御城下」という繁栄ぶりを示すにいたった。

筆者はこの相對請地が近代金沢の都市化の中でどのように再編されていくのか、また近世金沢において有していたこうした地域性といったものの伝統、継続性についてひとつの関心を抱いているのである。

10万人をこえる人口を有していた金沢は消費する商品の量も多く、周辺地からの調達では足りず、きわめて多くの地方からの移入品が必要であった。その多彩な商品にみあう商人が数多く存在する商業都市でもあったわけで、

城下の約半分の戸数は商家であったと考えられている。

さらに金沢は職人の町としての特色も持っていた。城下の職業構成をその多い順にみると、大工、紺屋、桶屋、鍛冶、畳刺といったものが上位をしめている。そのほか工芸職人、金箔、陶工といった金沢らしい職人層もめだっている。また城下町らしい職人として甲冑師、具足師、やり細工、あぶみ師、研師などもおり、ほとんどは本町に住んでいた。彼らは武家本来の職人で、諸職人のなかでも別格の存在であった。

城下町金沢の形成過程において、各町はそれぞれ述べたような役割をもち、また与えられてその機能を果たした。さらに各町には藩政の官僚機構の末端で、かつ一定の小さい枠内ではあったが、町人の自治的組織がおかれた。本町、地子町では肝煎の下に10数軒で1つの組（10人組—農村の5人組にあたる）が編成された。これは5人組が相互監視に力点があったのに対し、訴訟の取りつぎ、証文の保管、組内の親睦、あるいは相互扶助といった町民の日常問題を処理する隣保組織であった。また各町の役割、格式を守るといった伝統保守の機能をもちあわせていたことに注目しておきたい。こうしたことから町人とくに商人たちの中に相對請地や寺社門前町から地子町さらに本町に進出することを最大の願いとする考え方も生まれたのである。

ところで18世紀末以降ともなると、本町以下の各町の格差がしだいに無意味化していく事態があらわれてくる。このこと自身は封建的支配の弱体化と結合していたのであるが、その要因として要約的に述べれば、行政面において10人組が膨張し、画一的な機能を喪失しはじめたこと、下層民が増大し彼らの居住区分が不明確となったこと、本町特権商人層の一部没落と新興商人層の自立化、本町・職人町の地子町化、武家用職人の低落といった諸点をあげることができる<sup>(12)</sup>。

相對請地においては19世紀以降戸数・人口は停滞しているが、町分割による町数の増加が注目される。この地の住民の移動が激しく、「行政上の不手際が常に騒擾を惹起せしめる要因」<sup>(13)</sup>となることから「小町に分割し、町役人の住民把握を容易ならしめよう」とする政策のあらわれであった。これはこの地域を中心におこった安政5年の「米騒動」への対策のひとつであったことは言うまでもない。さらに「健全なる下級労働力供給機能を果させ」と

ともに「特産産業地帯の形成」<sup>(14)</sup>（加賀笠など）も志向された。

さて近世城下町金沢の特徴をおおざっぱではあるが以上のように整理したとすると近代以降の都市化の中で、それらはどのように再編・変貌をとげ、また何が伝統として継続されていったかを1920年代までを視野に入れて考えてみることにしよう。

明治維新を契機におこった次の2つの事態を象徴的なものとしてまずとりあげる。そのひとつは士族処分によって加賀藩の大量の家臣団が一挙に解体され、とくに下級士族は破産に瀕したことである。1885（明治18）年の時点で破産士族は1,000名を上まわったという。「青年の男子は他県に赴きて巡查、教師となり、妙令の女子は辺鄙に流浪して芸妓となり娼婦となる」（『石川県史』第4編、第6章参照）といったありさまであった。こうしたことは一般的に言われていたようで、1890年代末に金沢を訪れた横山源之助も全く同じような感想を残している（補論第3節参照）。また地租負担にたえかねて、地主は土地の引き受け手を探しまわり、本町の香林坊界限にもきゅうり畑がみえるというさびれかたとなった。人口減によるあきらかな変化と混乱が町をおおった。

もうひとつは、相對請地をめぐるおこった町方苦情事件である。地租改正作業が進む中で、相對請地の町民は、この地は村方からの借地であるという確証がない、地子米代銀は町会所に納入していた、などの理由を付して地券交付を県令に願い出た。当然相對請地の所有権の確認を求めて、村方は対抗して訴訟をおこした。原告は金沢の北部7地区、東部4地区、南部5地区、西部6地区にのぼり全市の規模になった。その解決までに約4ヵ年も費したといわれている。結論はいちおう村方の所有権を確認し、地租は村方が納入することを決めたが、町方の地代を実質的に減額する処置も行なった。さらに後になって村方の貸地を安価で町方に対して売渡すことを強制し、買い受ける資力のない町民には、県が立替えるという念のいった援助も行なった。相對請地町民の実質的な勝利で、大樋町では「記念碑」まで建立して祝ったほどである。

これらのことは近代金沢の開幕の例証で、封建都市が一挙に解体されるとともに旧藩政下の封建的規制を町の区分という点において撤廃・自由化する

動きであったといえよう。この背景には事実上、本町以下の各町の格付けの流動化という幕末の事態が底流にあり、そのことの表面化ともいえる。

さてこの相對請地のその後の動きを簡単にみてみることにしよう。明治維新後しばらくの間、金沢の町制、市域はたびたび変更されようやく1889（明治22）年にその確定をみた。藩政末期の相對請地をふくめた地域に若干の出入りをした程度で、基本的にはその市域は同一であるとみてよい。後述するようにそれは1924（大正13）年までは変更されていない。この市域は大正期には7つの聯区の編成のもと、534町に区分されていた。1町平均の人口は250人弱ときわめて少ない（第5章第6節参照）。もちろん1,000人をこえる町も11町あるが、住民ゼロが18町、10人以下が6町もある。この町も藩政末期のものがそのまま継続している。また7つの聯区は金沢城とそれをはさむ犀川、浅野川を利用して区分けされたものである。

旧本町・地子町・相對請地は、従って町名で場所を確認できるが、『金沢市統計書』（1908年以降）を用いると、その各町ごとの出入寄留数、および現住人口も知ることができる。資料の検討をここで行なう余裕はないが、結論的につぎのような諸点を指摘しておく。まず相對請地・地子町・本町の順で出入寄留率が低下していることである。特に相對請地の人口300人以上の町は出・入寄留数がいずれも多いという傾向がはっきりとしている。このことは金沢市全体の人口の伸びはにぶいが、特定地域の人口移動は激しく、なかでも相對請地地域においてそれが顕著であることを示している。ここが下級士族および日稼人の居住地であったことを考えあわせれば当然であろう。

出ていった人口はともかくとして、あらたに居住した階層はどのようなものであったのだろうか。藩政期と同様にこの地域が下層住民地区であるという事情に変化はみられなかった。いわば近代の都市下層社会的な色彩を示し、職人の下層部分、日雇・人足の居住地となって再編成されたのである。

金沢の下層職人の典型は箔打ち職人で、事実彼らは北部の旧相對請地に多く、特に大衆免地域にかたまわって集住していた。またこうした都市下層民を相手に、零細商も同地域に存在した。日稼ぎを頼りとする1升売りの米屋は

その典型である。彼らは一団となって、横山源之助が述べるような地方の都市下層社会を形成した。横山は都会(=大都市)と比較しつつ地方(都市)の下層社会の特徴を次のように指摘する(『横山源之助全集』第1巻「都会の細民と地方の細民」及び本書補論第4節参照)。①都会の下層民衆は妻帯者がすくないが、地方では大半が妻子をもち、近隣に親類、知人をもっている。②都会の下層民同志の生活は日常社交、義理人情がすくないが、地方では交流が不可欠で人情味豊かである。③地方下層民は家計補充のため妻が内職をしている。④都会の下層民衆にとって周囲の生活水準が高いため物品をもとめやすいが、地方では衣食住のための物品を得にくい。

地方都市の場合、同一地域の下層民衆は共同生活、相互扶助によってようやくその日常生活を維持していたと考えてさしつかえない。

このような地域共同体的なまとまりにさいして、各町の町内会が藩政期の10人組にかわってその役割を果たした。町の区分を現在の新町や住居表示区分と照合してみても気づくことだが、現代の町は道路を町の区画に用いているのに対し、戦前の旧町は道をはさむ家々で編成されている場合が多い。城下町はいずれも狭い曲りくねった道と所々に広い火除けの広場とをもつが、狭い道とて子どもの遊び場であり、町民の交流の場であった。特に金沢では冬期に除雪の重労働があり、これは道の両側の家々の一致協力した共同作業をどうしても必要とした。従ってそうした町および町内会がひとつの日常生活の単位と同一となったわけで、前述のような都市下層社会的地域ではなお一層その傾向が強かったのである。

町内会は新しい住民組織として、藩政期にくらべて自主的色彩は濃くなったが、市町を行なうべき地域内諸行政、たとえば道路、衛生、消防、土木などの事業がいぜんとしてそのまま住民の負担に残された。町内会はそれらを代行する役割を担ったのである。国税・地方税を納めなくてもよい低所得層の住民さえ、多額の町内会費を負担させられることとなった<sup>(15)</sup>。そのため行政でさえ簡単には立ち入ることのできない権威を形成する場合もあった。

しかし、町内会の住民の階層や生活基盤が同一の場合は、さして問題とならなかったが、新しい都市的住民、近代企業や官公庁のサラリーマン、そうした都市中間層といった個人主義的な生活様式をもつ住民が加わりはじめる

と、町内会の性格にも大きな影響を及ぼさざるをえなくなっていた（その後、町内会は歴史の波にもまれながら現在まで続くが、ここではこれ以上問わない）。

このような都市中間層の発生は、金沢の場合、地方都市の中では比較的早かったと考える。それは北陸の中核的都市であり、商業、消費都市であったことと不可分である。地場資本に基づく中小、零細の商工業者も比較的多数存在した。官吏・公務員が職業別戸数割合のなかで占める位置も大きい。また第9師団が設置された軍都でもあったからである。筆者は都市的中间層がひとつの階層として都市の中で一定の役割をもつことを、都市化の重要な指標に考えている。とくに6大都市においては、そうした都市中間層がひとつの政治集団として大正デモクラシーの一翼を担っていた。しかし金沢では、彼らは集団化も共同行動もせず、まして利害の一致する目標があっても他階層と共同しなかったことが特徴であった。

やや主題からはずれたが、旧相對請地という点から歴史的に観た場合、その地域が共通し、継承してもっている地域的特性、それも筆者は城下町の「伝統」とみるが、それを重視したいと主張するわけである。この点を次節以降は工業という側面から論じてみることにしよう。

### 第3節 金沢の伝統工業

『稿本金沢市史』の工芸編によると旧藩時代の工業はそれ以前からの加賀絹、梅染、鍛刀工に加えて武具工芸、箔、窯業等が著れたるものであったとその総説を書き始めている。以下の各節では刀剣、甲冑、鑄物、菅笠、彫刻、陶器、樂焼、彫金、漆器、染物、製箔を取り上げ、末尾に武具の細工職を付載している。もちろん陶器には木米窯、春日山窯など各種あり、染物にも多種を数えるが旧藩時代の特産品を含めておおよそその内容を網羅していると考えられる。本節では各々の旧藩時代の生産状況を見ることが趣旨ではなく、これらが近代以降の金沢でどのように存続、あるいは再編されたかに主眼を置いて考察する。金沢が城下町であったことから、その工業は主体となる武士の日用生活品、必需品の生産が多くをしめていた。したがって近代以降士

第4章 地方都市金沢と伝統工業

表4・4 人口5万人以上都市の主要工業別人口比 (1920年)

工業人口比 順	工業従 事者数	業種別工業比10%以上五位まで (中分類基準)										工業比								
1	八幡	29,986	金属	65.2																66.6
2	前橋	17,096	繊維	69.0																58.3
3	堺	17,763	繊維	30.8	金属	13.5														50.7
4	和歌山	15,018	繊維	37.8	木竹	21.8														49.7
5	呉	28,609	機器	39.4	金属	31.6														49.4
6	岐阜	14,226	繊維	44.7	被服	18.1														48.9
7	浜松	13,679	繊維	39.2	被服	10.1														48.2
8	福井	11,091	繊維	49.1	被服	10.7	木竹	10.5												46.2
9	名古屋	80,628	繊維	20.8	被服	12.2	木竹	11.8	金属	11.0										45.8
10	甲府	11,209	繊維	48.5	被服	12.6														45.5
11	豊橋	14,577	繊維	64.9																45.0
12	徳島	12,391	繊維	30.8	木竹	16.6	被服	13.9	飲食料	12.5										44.6
13	長崎	30,831	金属	29.1	機器	23.9	土建	10.1												44.5
14	岡山	17,169	繊維	37.4	飲食料	14.0	土建	11.3	被服	11.0										42.9
15	神戸	107,785	機器	21.7	金属	17.8	土建	14.2	化学	10.9										41.6
16	金沢	19,645	繊維	22.5	金属	17.6	飲食料	12.5	木竹	10.7										41.3
17	室蘭	8,748	金属	65.3	土建	13.5														41.2
18	鹿児島	15,454	繊維	30.4	飲食料	22.3	被服	11.5	土建	11.2										41.0
19	静岡	11,734	木竹	33.8	飲食料	14.9	被服	14.8	土建	10.2										39.9
20	那覇	10,057	繊維	25.3	被服	24.3	飲食料	17.8	木竹	11.0										39.3
21	松山	7,331	繊維	38.4	飲食料	14.0	被服	11.8	土建	10.3										38.3
22	大牟田	9,467	繊維	17.8	金属	17.4	化学	17.2	土建	15.8										36.9
23	富山	7,794	木竹	14.6	被服	13.9	化学	12.8	土建	12.7	繊維	12.0								36.7
24	横浜	63,709	金属	15.7	土建	14.5	機器	14.4	被服	12.1	繊維	11.9								36.5
25	札幌	13,540	土建	17.3	飲食料	15.4	木竹	15.3	繊維	10.6	金属	10.4								36.5
26	広島	23,035	被服	19.7	木竹	13.7	飲食料	13.0	金属	11.5	土建	10.7								35.2
27	宇都宮	7,984	飲食料	28.5	土建	14.6	被服	14.5	木竹	12.1										33.5
28	福岡	11,914	土建	19.9	飲食料	13.1	被服	12.6	繊維	11.7	金属	11.2								33.2
29	佐世保	13,633	機器	33.4	金属	25.1														32.9
30	熊本	8,935	飲食料	28.2	被服	16.9	土建	10.7	繊維	10.1										31.5
31	横須賀	14,528	機器	32.2	金属	27.1	土建	10.0												31.4
32	新潟	11,389	木竹	21.2	被服	14.4	金属	12.5	土建	11.6	繊維	10.2								31.0
33	仙台	13,606	飲食料	20.1	繊維	17.5	土建	15.9	被服	12.7	木竹	10.7								30.4
34	函館	13,609	土建	17.5	飲食料	15.8	被服	13.6	金属	13.5	木竹	12.7								25.0
35	門司	7,927	土建	22.4	窯業	17.5	金属	14.3	飲食料	10.9										24.4
36	旭川	6,415	木竹	23.9	土建	22.1	飲食料	19.4	被服	11.1										24.4
37	小樽	9,704	土建	20.5	飲食料	18.5	被服	16.4	木竹	13.9										23.7
38	下関	6,203	土建	18.3	飲食料	16.1	金属	11.9	木竹	11.7	被服	11.7								19.7

海野福寿「工業発展と都市の動向」(『明治大正郷土史研究法』朝倉書店、1970年)  
150～153頁より作成。なお原資料は『国勢調査報告』(1920年)。

族の消滅と歩調を合わせたものも多いが、その点の対象の外とする。

すでに表4・3において産業別人口の比率を考えたが、ここではさらに工業内の業種別の比率を他主要都市の傾向とともに検討してみる。

表4・4は1920(大正9)年『国勢調査報告』をもとに、人口5万以上の都市の工業人口を整理したものである。工業人口比の高い順に、各都市の中分類業種別の主な工業をピックアップしてある。

全国の地方都市の中で金沢の工業の特徴を考えると次のようなことが指摘できる。全産業別の中での工業の比率は比較的高く、人口規模をあわせ考えると岡山、静岡、長崎、鹿児島等と近似している。次に業種別では金沢の第1位は繊維で、次位の金属とあわせると工業内の4割をしめている。この点だけに限定すると堺、大牟田が同傾向であるが、両都市と金沢とが都市工業の性格面で一致するところは少ない。金沢の場合、金属の一部、第3位の飲食品業、第4位の木竹加工工業等はいわゆる伝統工業と称されるものが大半であるからである。

以上の点をもう少し金沢に限定してみるために3つの表を用意した。

表4・5 金沢市の業種別工場構成(1921年)

工場数	内原動力 保有工場	職工数	産 額	職工数別工場規模					
				5人 以上	10人 以上	30人 以上	50人 以上	100人 以上	
繊維工業	82(35.5)	64(78.0)	4,287	13,497(62.0)	12	37	12	4	17
機械器具工業	64(27.7)	42(65.6)	1,157	1,910( 8.8)	30	27	3	-	4
化学工業	13( 5.6)	8(61.5)	752	1,505( 6.9)	4	4	3	-	2
飲食品業	36(15.6)	23(63.9)	404	2,234(10.2)	20	15	1	-	-
雑工業	36(15.6)	20(55.6)	670	2,633(12.1)	20	12	1	1	2
合 計	231	157(68.0)	7,270	21,779	86	95	20	5	25

『金沢市統計書』より作成。工場数、産額欄の( )は同構成比、原動力保有工場欄の( )は全工場数との対比で、どちらも%である。産額の単位は1000円。

表4・5は1921(大正10)年の資料である。この表においても工場数はともかくとして、職工数・生産額の面で繊維工業は6割という圧倒的な位置にあることがわかる。そしてそこには100人以上職工保有の大工場が存在するが、繊維工業以外の各工業は30人以下の小規模工場で、とくに機械器具、飲

表4・6 金沢市の重要工産物（上位10品目）の産額

1898年		1908年		1918年		1928年	
絹織物	314千円	絹織物	3,113千円	絹織物	13,114千円	煙草	12,353千円
清酒	289	清酒	542	煙草	3,390	絹織物	11,588
綿織物	256	陶磁器	286	製材	2,095	綿紡績	6,417
染物	192	製網	259	綿他織	1,443	菓子	3,550
箔	159	刺繡	254	陶磁器	1,136	洋服類	3,308
絹綿織	105	製靴	249	箔	1,087	箔	2,790
陶磁器	92	醤油	158	清酒	993	綿織物	2,489
漆器	68	箔	154	菓子	838	清酒	2,237
菓子	61	石燭	144	製糸	827	印刷	1,900
醤油	59	漆器	135	織機	802	製網	1,652
総計	4,350,071	総計	8,646,738	総計	38,390,924	総計	63,372,105

『金沢市統計書』より作成。総計のみ単位は円。

表4・7 金沢市内の絹織物生産の展開

	1908年	1918年	1928年	1938年
輸出用羽二重	1,837	10,026	2,519	3,016
縮緬	—	2,211	4,354	4,630
総計	1,948	13,424	11,588	8,967

『金沢市統計書』より作成。単位は1000円。

食品、雑工業は大半が10人前後かそれ以下の零細経営であった。さらに1920年代に入ってもそれらの各工場の3分の1は原動力を使用しないところの手工的段階であった。その多くが伝統産業を主体とした工場であったことを示している。

つぎに金沢市の重要工産物の生産額を表示した。1898（明治31）年以降、10年毎に機械的に年次を追ってみたが、金沢市の工業の展開の特徴の概略を知ることができる。当面次の諸点を読みとっておくことにしよう。明治以来絹織物が主要品目の第1となっており、その他近代工業製品としては綿織物、織物機械等関連品目がある。ついで清酒、染物、箔、陶磁器、菓子、漆器

などの金沢の伝統物産品の産額が目につく。このうち箔工業は好不況の波が激しいが、全工産額の2～4%を常にしめている。表示した上位10品目の産額の全工産額比は40%弱から、1920年代には80%弱と次第に増加し、金沢の特産品の傾向が時代とともに明確になっている。また全工産額の伸びは第1次大戦期に著しいことも予測しうる。

金沢の主要工産品である絹織物の生産額の内訳を見たものが表4・7である。1920年代以前は輸出用羽二重生産がほとんどであったが、世界恐慌以降低下し、縮緬(ちりめん)が首位にたつ。1930年代は両品でやはり絹織物生産の大半をしめている。絹織物業の展開に関しては石川県全体の中ですべて述べておいたが(第1章第4節参照)、主力となる輸出用羽二重は1910年代に最も隆盛を誇っていたことになる。輸出用羽二重生産は加賀・小松の伝統的な在来の絹織生産の影響を受けてはいたが、典型的な器械織であったところに特徴がある。

以上の3表の検討と本節冒頭の『稿本金沢市史』の指摘から、近代以降に存続した金沢の伝統的な工産品としては陶磁器、染物、箔、漆器、清酒、菓子などの品目をあげることができる。

#### 第4節 箔工業と箔労働者

旧藩以来の歴史を有する工業を伝統工業とみるならば、前節の分析を通じてその1典型例として箔工業を選び出すことに異論はなからう。そしてその1中心地は旧相對請地のひとつであり、そこにおける地域的特質も近代の箔工業の展開と不可分な関係にある。この点を重視して若干の検討を深めることにしたい。

「金銀などの貴金属は、古来、人の心をとらえて放さず、貨幣などに使われたのみならず、多くの美術工芸品として生活を飾った。その場合、粘着性に富むところから、薄く延ばして使う方法—いわゆる金箔にして裝飾することも喜ばれたのは想像に難くない。おそらく、金銀そのものを素材に使ったのとそう違わないことから、金箔や銀箔も作られるようになったと思われる」<sup>(16)</sup>

金沢箔の歴史を研究した下出積興は、箔の起源についてこのように書きは

じている。金箔は色合、光沢が永久に変色しないのが特徴であり、きわめて薄く、かつ軟かであるためこまかい加工ができ、箔の王座を占める。その主な用途は「仏壇、仏具、屏風、表具、ふすま、額縁、製本、マーク、金文字、看板、織物、金糸、売葉、陶器、漆器、扇子、鍍金、押紙」<sup>(17)</sup>とおそろしく広い。しかし近年では銀箔だけでなく洋箔（真鍮箔、銅箔）、アルミ箔も数多く見られるようになってきた。これらは金箔の代用品として生まれたもので価格も安い。ここでは金箔のみをとりあげて、以下箔工業の展開を藩政時代から1920年代まで略述する。

加賀藩の金箔の歴史は藩祖前田利家の頃までさかのぼる<sup>(18)</sup>。京都より箔打ちが移入されて箔屋が金沢に姿をみせたが、やがて17世紀中葉、幕府は金銀の統制をかねて、各藩での貨幣鑄造の禁止をおこない、一時金沢箔は中断されるところとなった。その再興は19世紀初、金沢城二の丸の焼失という事故がきっかけとなった。城再建のための莫大な金箔を、幕府の許しをえて藩は金沢安江本町町人伊助に調達させた。その当初は京都職人の力を借りたが、苦節10年、金沢でもかっけての技術が復活した。やがて藩の庇護もうけて小工場が分立、それぞれ発展して、19世紀中頃にはマニファクチュアの段階にいたったと考えられる。しかし一方では原料（金）の買入れと製品販売を少数の間屋に支配され、また市場も極端にせまかったこともあって、マニユ段階以上には自主的な発展はできなかった。このような問屋制支配の評価に関して次のような見解がある。問屋制の支配によって、箔生産は「地金の圧延、上澄、打立、うつし、包装の部分工程」に分化された。そのもとにおける「生産の分化した発達は、それらの生産者の労働が、すでに完成生産物生産のための部分労働にすぎなくなったことを示しており……相互に補足し合って一つの完成生産物を生産する協業関係は、きわめてマニファクチュア的なものである」<sup>(19)</sup>。

明治維新後社会が平静にもどると箔の需要も急速に高まり、300年間の全国的な禁制からの解放も手伝って金沢箔工業への新規従事者が殺到し、1880（明治13）年頃には箔打職工の数は1,500人にも達したといわれる。金沢箔は特に評価が高かったが、その理由は「槌打精妙ニシテ薄ク、金量随フテ少ナキニヨリ、他産ニ比シテ価格ノ自ラ廉ナルヲ以テナリ、是レ我地方工人ノ特

ニ一種ノ方法ニヨリテ原料粘着力ノ極度ニ達スルマデ之レヲ薄片ニスルノ技術ヲ有セシニ起因ス」<sup>(20)</sup>と説明されている。

こうした技術的優位によって他の地方箔を駆逐し、金沢箔の独占的地位は高まっていった。しかしやがて金沢箔同士の販売競争、そして粗製乱造をひきおこし、折しも松方デフレ・不況期の到来も加わって、一転没落の憂き目を見る。「工人ノ多ク他業ニ転ジ、一時到ル処当業者ノ歎声ヲ聞カザルハナシ」<sup>(21)</sup>という有様となった。

この苦境期の1888（明治21）年、箔同業組合が結成され品質、価格の協定などの策がとられたが、詳細は不明である。日清戦後の近代化の好況の波ののって再び繁栄をとりもどし、日露戦後には「二十六軒の箔問屋を数え、羽二重につぐ金沢特産品としての地歩を確保するにいたった」<sup>(22)</sup>。

1900年代末に金沢箔は著しく需要をのぼし、全国的にも名声を博したが、後述するように家内工業における手工的な労働が主体で、当然そのため、箔生産工程の中で最も機械を導入しやすい箔打ち部門での、機械発明にとり組むものがあらわれた。

金沢市内箔業者の三浦彦太郎は日清戦後から打箔機の考案をはじめ、改良に改良を重ねた結果、1911（明治44）年、打箔機の製造に成功した。当初は質・量ともに手打ち箔をしのぐまでにはいたらなかった。第1次大戦後、それまで世界市場を独占していたドイツ箔が後退し、金沢箔にとって広大な市場がひらかれた。そうした好機にその需要増大にこたえるべく、優秀な打箔機の完成がなったのである。

表4・8は1900年代末～1920年代の金沢箔生産の動向を示したものである。この時期になると箔は金沢の全工産額のうちの5%を確実にしめるようになっている。箔生産は1910年代まではその4分の3が金箔であるが、機械打ちが開始されると、例えば1924（大正13）年のように3分の2が金箔といった具合に洋箔等の比重が増加していることがわかる。

さて表4・8は一見してあきらかなように、第1次大戦後の打箔機導入の影響が金箔生産増に直結していることを示している。第1次大戦の前後を比較すると金箔生産額にして6倍強、生産枚数にして3倍弱といった増加の具合である。これにはもちろん好況による箔労働者の増加も関係しているが、

表4・8 金沢市内の金箔の生産

	金沢市の 全工産額 A	箔 生 産 額					箔関係 原動機付箔工場		
		総 額	Aに 対する %	内金箔生産		洋箔 生産額	職工数	工場	
				生産額	生産枚数			職工数	工場数
1909年	6,721	363	5.4	272	1,360	48	1,341	—	—
14	12,988	439	3.4	325	1,810	33	791	—	—
19	58,892	3,151	5.4	2,064	4,800	378	1,880	470	13
1924	45,853	2,872	6.3	1,840	4,600	292	1,460	396	20
29	57,750	2,654	4.6	1,849	4,301	229	826	305	19

『石川県統計書』、『金沢市統計書』より作成。産額の単位は1000円。金箔生産枚数の単位は万枚。

やはり原動機付箔工場の登場の意義の方が大きい。しかしながら、打箔機が万能であったわけでは必ずしもない。1920年代の段階では手打ちの優秀な職人は月3000枚を打つことができ、機械打ちでは月5000枚といったところであった。ただ優秀な職人の養成には時間がかかり、一方機械打ちは比較的短期間で修得できる利点はあった。また質のよい製品は何ととっても長年にわたって習熟した職人の腕とカンに頼らざるをえなかった。打箔機にも一定の限界がおのずと存したわけである。さらに箔生産工程の中で打箔工程は一部分で、他部門は相変わらず手工的労働にゆだねられて機械化できなかった。ここに箔生産が工場制工業として発展しえなかった理由の1つがある。それはともかくとして、1919（大正8）年はこの期の最高産額を生みだした。しかし第1次大戦後の反動恐慌、そして恐慌から恐慌へと日本経済がよろめく中で箔生産者たちは大きな試練にあい続けるのである。第5章との関係で前年の1918（大正7）年の米騒動時はどうであったか。この年もやはり箔にとっては不況下で、しかも大幅な物価高、米価高騰の連続であった。とくに箔労働者は極度の生活難にあえいだのである。

箔工業の1910年代迄の展開をみてきたわけであるが、一定以上の発展をしない歴史性を有していたことがわかる。もともと問屋制的支配下にあったが、明治以降も商人資本への従属的な関係が続き、また小経営規模を守りとおしている点などを指摘しておこう。次に金箔が奢侈品または高級工芸品の部分

的な装飾材料であることから、自ら新しい市場を開拓できず、生産がほとんど注文取引に限られていたことも発展を阻害した理由である。箔工業の近代化を押しすすめようとする動きもみられなかった。また前述したように度々不況の波にのみこまれているが、これは原料が金であり、その使用に困難性が常につきまっていたことも考えておかねばならない。最後に生産技術の手工的性格、非機械化部門の多いことなどの点であるが、この点をもう少し立ち入って労働の面から検討してみる。

戦前の金沢市内の箔工業地域は大体2つの場所にかたまっていた。もっとも大きな地域は、市内卯辰山の西側、浅野川右岸の一帯で、いわゆる旧相對請地の大衆免地域である。もう1つは犀川右岸の上菊橋～下菊橋周辺でここはそう広い地域ではない。箔の一帯に入るとあちこちから箔を打つトントンという独特の槌音が聞え、誰にでもわかる雰囲気か漂っていたそうである。

まず箔の生産工程を簡単に解説することからはじめよう。この点については下出前掲書がもっとも詳しい。金箔の生産は金を薄くたたき伸ばして箔にするものであるから、素人には簡単な作業のように見える。しかし実は十分に計算された精密な作業が根気よくくり返される仕事である。それは大別すると上澄製造、箔打ち、箔うつしの3工程に分かれる。さらに箔打ちには特殊な和紙の力が絶対に欠くことができず、この紙の生産工程も含める4工程ということになるが、ここでは割愛する。

第1工程から順に見ていくことにしよう。金箔の原料は金ではあるが、正確には若干の銀・銅を含んだ合金で、その微妙な割合の合金作りから上澄屋の仕事ははじまる。これをまず100分の3ミリ位まで延槌で叩いて伸ばす(現在ではロール機を使用)。これを小さく(約2寸角)切っては澄打紙に1枚ずつ入れ、約200枚ほど重ねる。そして5寸角位に叩きのぼし、また小片に切って澄打紙にはさんでは叩くという同じような作業を5回くり返す。こうして仕上がったものを上澄(うわずみ)といい、それは約1000分の3ミリの厚さとなっている。

第2工程はこの上澄を大体1万分の2～3ミリの薄さにのぼした金箔に仕上げる工程で本格的な製箔工程である。基本的には箔打紙の間に上澄の小片(小間という)を入れ、打ちのぼし、小片にして他の打紙の間に1枚ずつは

さみ、打つという作業をくり返すわけであるが、この間、次第に伸びやすい打紙にうつしかえ、熱をもった紙、小間をさますなどの技術は長年のカンに頼るところが大きい。

さて打つ作業であるが、打紙と小間とを500枚ほど重なったものを、普通は向いあった2人で打っていく。熟練の職人が主槌（おもづち）をもち、石場の上ののせていろいろと移動させながらトントンと打つ。その1打の間を対面の徒弟・丁稚が2本の向槌でト TENT テンと打ちこむのである。一通り表が打ち終るとひっくり返して裏から同じように打つ。この作業の部分に打箔機を使うようになるのである。打っては他の打ち紙にはさみかえ打つというこの工程は何回、どの程度行なうかは必ずしも一定していない。箔が打紙一杯にきれいに均質の厚さにのびて、大体5寸5分角、1万分の2～3ミリになれば仕上りということになる。

第3工程は金箔の仕上げ工程である。打ちあがった箔を、また1枚ずつとりだし広物帳にうつしかえる。その時、金箔は非常に薄く軽いものであるから風は禁物だ。静かにそっと天狗爪と仕事箸をつかってうつす。これをさらに1枚毎にとり出して合竹（あいたけ）で適当な大きさに切り揃える。所定の寸法では3寸6分角、4寸2分角、5寸2分角、7寸2分角で、それは現在もかわりはない。同じ大きさのものを100枚ずつ束にし、さらに5束あるいは10束ずつ箔箱に入れて完成となる。

つぎにこうした箔の生産工程に、箔労働者がどのようにかかわったのか、その労働と生活、さらに彼らの意識の問題について少しとりあげておこう。この点に関して、1973（昭和48）年11月、金沢の箔労働者（60歳～70歳代5名、他に鉄工労働者1名）からの聴き取り調査をしたことがある。それは箔工業と箔労働者の戦前期の労働実態等を知ることと同時に次章であらためてふれるが、箔労働者を中心として展開した金沢米騒動の様子を聞くことが目的であった<sup>(23)</sup>。このテープは3時間ほどのものであるが、まだ十分に利用されてはいない。筆者もその調査に参加したので、この機会に一部、資料を公表しておくことにしたい（以下、本節に限り注記のない「」はそのテープからの引用である）。

箔労働者の労働と生活は厳しく貧しいもので、下層民衆と呼ばざるをえな

表4・9 1910年代後半の金沢市内の職人賃金（日給）

	箔職工		日雇人夫		塗師		鋳物師		大工	
	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低	最高	最低
1915年	100	30	75	50	85	60	90	55	95	65
16	100	30	70	40	85	60	90	55	95	65
17	100	40	75	50	115	60	100	65	100	70
18	109	66	84	65	160	75	140	87	154	81
19	180	100	170	80	250	100	250	120	230	90

各年『石川県統計書』より作成。単位は銭。

いような下積みのものであった。上の表4・9は表向きの賃金表である。

しかし、それでも箔労働者の、とくに熟練職人でない部分は、他職人のどの最低賃金よりも一段と低いことが分かる。親方のもとに、何人かの熟練職人と何人かの修業中の徒弟・丁稚がいたが、徒弟・丁稚は住みこみが多く、「月25銭もらうのがやっとだった。月2回の休みのうち、1日に15銭、15日の休みに10銭もらった。その頃活動写真が5銭と記憶している」。前述したように打箔労働は2人の組で行なったが、未熟な徒弟が打ち損じると「主槌で頭をたたかれた。ものすごく痛かった」。労働時間は「朝7時から一応6時まで、しかしそのあと夜なべが10時頃までであった」というから大変な長時間労働である。聴きとりの座談に参加した人々は60～70歳代とは思えぬほど皆は年老いて痛々しかった。長時間労働と、風をきらう空気の悪い仕事場などが彼らの肉体をむしばんだのだろう。丁稚は8、9歳頃から入り、したがって箔打近辺には大正期に夜間小学校があり、通学したとのことである。子ども達も全く同じような仕事についていたわけだ。食事は大変そまつだった。「お湯づけ、冷やめしに湯をかけたもので、いもが入っていれば上等だった。それにつけものが少々。夜、味噌汁が出ることがたまにあったが、のぞくとたにしが入っている。喜んですくおうとすると自分の目玉が写ったもので、何も入っていなかった」。

最後に、箔労働者の意識について次章ともかかわるのでふれておく。それは全体としてみると複雑なものなので、次のように整理してみた。まず職人

気質というか保守的な側面を指摘しなければならない。「箔打ちはバクチ打ち」といわれるように、宵越しの金を持たないという旧職人的な性格の一面があった。そして仲間意識も強い。しかし一方では自己の境遇とも関係して「しいたげられた人々への同情心もあった」。隣接地区にひがしの廓があったが、その芸者女郎等への同情から彼女らの逃亡を手助けしたり、また身うけするものもいたということである。「今でも仕事が箔打ちだといいいにくい、昔は毎日のように、新聞にバクチ、ケンカ、無銭飲食の箔打ちと出て有名だったから」と述懐する人もいる。

ところでもう一側面では進歩的な、文化的な面もあわせもっていた。

「2人で向かいあってやる仕事だから、話はいろいろはずむ。職人の中には暇をみながら皆に新聞を読み聞かせる者もいた」。そうした会話・話題を通じて目を社会にむけたのであろう。「社会主義は当時の職人の間にはやった言葉だった。民主主義という言葉も知っていたし、仲間の1人に社会主義をあまり問題にするので警察に呼ばれたヤツがいた」。こうした話がかつての箔労働者の口から矢継早やにとび出すのである。たしかに箔労働者には全体としてこうした思想水準があり、戦前において「金沢の労働運動の担い手となったのは、厳密な意味では近代的な賃労働者とはいえない製箔労働者」<sup>(24)</sup> という評価は妥当であろう。

さて以上は金沢の性格を考えるために、近世から戦前期という時代における相対請地の動向を不十分ながら追うという作業をしてみた。この地がもっている地方都市の下層社会的な特徴とその歴史というものから伝統的都市の内容を考えようとしたわけでもある。金沢を伝統的都市と呼ぶ場合、応々にして城・武家屋敷・武家の生活様式だとか職人・職人まち、彼らの美術工芸に目を奪われがちである。こうした傾向に対して消極的な意味で筆者は批判をしようとしたつもりである。下層民衆が培ってきた生活、意識の面での伝統性等といったややオーバーな表現であるが、今後もこの点を掘り下げてみなければならないと思う。その意味で次章米騒動は本章とワンセットになっている。

伝統ということについてももう1点最後に付け加えておく。浅香年木は金沢市が発行した『金沢400年・郷土のあゆみ』(1982年)の中のいくつかの「手

抜かり」を指摘し、批判を加えている<sup>(25)</sup>。筆者は浅香の真意を次のように読みとって基本的には同意したい。それは書名にもあらわれているように、金沢の歴史を近世以降（より正確には藩政時代のみ）に押し込めてしまい、近世以前と近現代を断絶させるという誤りをおかしている。したがって一般的によくみかけるが、金沢の伝統は旧加賀藩時代の伝統であってそれ以前に接続する伝統を否定するものとなっている。一向一揆が織田軍に徹底的に抵抗したこと、内灘基地反対闘争はこの地なりに脈打つ抵抗の伝統を生き生きと示しているのではなかろうかと筆者は考える。あるいはそうした抵抗の伝統の側面だけを意識的に切り落としてはいないだろうか今後も問い続けることにしたい。またその一端を次章の米騒動はうかがわせるのである。

- 1) その1例として『講座日本の封建都市』（全3巻、文一総合出版、1981～83年）を紹介しておく。
- 2) 原田伴彦「城と城下町断想」（『城下町・再考』、石川県教育文化会議編、1984年）。
- 3) 松本四郎『日本近世都市論』（東京大学出版会、1983年）105頁。
- 4) 浅香年木『北陸の風土と歴史』（山川出版社、1977年）128頁。
- 5) 宮城音弥『日本人の性格』（朝日新聞社、1969年）116頁。
- 6) 同前、117頁。
- 7) 祖父江孝男『県民性』（中公新書、1971年）17頁。
- 8) 豊田武『封建都市』豊田武著作集第4巻（吉川弘文館、1963年）340頁。なお原典は『日本の封建都市』（岩波書店、1952年）である。
- 9) 参考とした主な著書は、田中喜男『城下町金沢』（日本書院、1966年）、同『加賀藩における都市の研究』（文一総合出版、1978年）である。
- 10) 松本前掲書、37～38頁。
- 11) 本岡三郎『金沢という街』（金沢実業会、1959年）86頁。
- 12) 水上一久「城下町金沢の職業構成」（金沢大学『法文学部論集』哲学・史学篇9、1962年所収）。
- 13) 田中喜男「近世末期、金沢の町支配」（前掲『講座日本の封建都市』第2巻所収）284頁。
- 14) 同前、285頁。
- 15) 本岡三郎編『金沢市と町内会』（金沢市町会連合会、1967年）を参照。
- 16) 下出積興『加賀金沢の金箔』（北国出版社、1972年）2頁。
- 17) 中村静治『地方特殊産業の構造』（石川新聞社、1951年）210頁。
- 18) 旧加賀藩時代の金箔史は下出前掲書がくわしい。
- 19) 河野信次郎『金沢箔の沿革と現況』（私刊、1966年）41頁。
- 20) 『金沢工業沿革誌料』（金沢市役所編刊、1905年）110頁。

#### 第4章 地方都市金沢と伝統工業

- 21) 同前, 111頁。
- 22) 河野前掲書, 43頁。
- 23) 石川県社会運動史刊行会の米騒動研究グループの企画・調査である。金沢米騒動に関する部分は, 第5章で利用している。
- 24) 『金沢市史』現代篇下(金沢市, 1969年)120頁。
- 25) 浅香年木「『金沢四百年・郷土のあゆみ』批判」, 前掲『城下町・再考』所収。